

朝鮮初期金属文化に関する新資料の紹介と考察

有 光 教 一

【要約】 私は、一九六三年秋、戦後初めて韓国を訪問し、新出の考古学資料を見てきた。概要を帰国直後の史学研究会十二月例会で報告した。そのうち、初期金属文化に関する話題の中から興味深いものを選んでまとめたのが本小篇である。永同楡田里支石墓から特殊な出かたをした磨製石剣・石鏃・石斧。金海茂溪里支石墓から銅利器の破片と一緒に出土した極端に形式化の磨製石剣。扶余蓮華里の石室内に共存した銅剣、細文鏡破片及び飾玉。全南靈岩出土と伝える剣・戈・鏃・斧・鉤の鎔范群。これらの注目すべき資料をここに紹介する。

史林 四八巻 二号 一九六五年三月

1

韓国史学者の集りである震檀学会から、梅原末治博士に随伴して来韓し第二次世界大戦後に出土した考古学の資料をみるようにとの招待状をうけとって、私が十八年ぶりに半島の土を踏んだのは、一九六三年十月五日のことであった。梅原博士は事情があって行かれなかったが、私は一ヶ月滞在して十一月五日に帰国、その間、大半をソウル市で過ごし、国立博物館、ソウル大学校博物館、高麗大学校博物館を訪ねて、新出の資料を見せてもらい、あ

るいは発掘談をきき、あるいは調査研究の経過を聞いた。

第二次世界大戦後二十年に近い歳月がたっているので、動乱や政情不安があったとはいえ、その間に出土した考古学の資料は夥しい。限られた私の滞在日数のあいだにそれらを消化することはむずかしいと、初めからわかっていたのであるが、幸い博物館の人達は、私の関心のむきそうな部門の資料を用意してまわってくれた。それは、石器時代から金属文化初期にかけての遺物であった。かような好意があったからこそ、最も能率的に仕事ができたと、私は感謝しながら帰ってきた。本小篇では、そのうちの初期金属文

化に関する資料の一部を紹介し、考察を試みる。

起草にあたり、私は、国立博物館の金載元館長以下の館員諸氏の配慮に対し、心から謝意を表明したい。また、本篇の挿図については吉本堯俊氏の助けをうけたことを明記し感謝する。

なお、ソウル市の崇実大学の金良善教授に対して、感謝の意を表明せねばならない。金良善教授は、初期金屬文化に関する貴重な蒐集品の一部を、私のために、わざわざ展示してくれられた。その中に、劍・戈・鏃・斧・戈など銅利器の鑄型が含まれていて、私を驚嘆させた。それらについては、本文4節に記す。このコレクションを見学することについて配慮をたまわった高麗大学の金廷鶴教授およびソウル大学校金元龍教授と、通訳の労をとられた国立博物館員李蘭暎嬢にも厚くお礼を申述べたい。

2

韓国では、偶然発見される埋蔵文化財は地方庁経由で国立博物館にとどけるように、法的にきめられている。出土状況などに關する調査書を添えるので、それらの多くは考古学的資料として充分役立つ^①。そしてまた、同博物館の専門家による計画的調査を誘

い、重要な事実を明らかにした例もすくなくない。私が同館に通って調査した資料というのは、そのような背景をもったものである。ここで、まず提供された資料は、磨製石劍とその伴出遺物であった。

第一表は、国立博物館で見た二十九本の磨製石劍について、形式と分布の關係、出土遺跡の構造と伴出遺物を示すために、私が前に試みた分類によって整理したものである。無樋一段柄式(B1a)が十五本、無樋二段柄式(B2a)が十本、有樋二段柄式(B2b)が一本であった。B1aは、忠清道、全羅道、慶尚道にわたって分布し、主として錦江流域と洛東江流域に集まる。B2aは、忠清道、慶尚道のほか、京畿道と江原道にも分布する。ただ一例のB2bは、忠清南道礼山郡古徳面の出土である。以上の分布状態は、かつて私が『朝鮮磨製石劍の研究』のなかで指摘した「石劍の形式と分布」^②の關係を、一層確実なものとする。また出土遺跡の構造をみると、「埋葬址の種類と石劍」^③の組み合わせに関するかつての私の見解を改訂する必要はないが、原状が判明する限りでは、支石墓からの例が大巾に増加した。

第一表

遺跡の所在	遺跡の種類	石剣の形式	伴出遺物	文献
京畿・水原市草西洞		B1b		
京々 抱川郡二東面場岩洞		B1b		
〃 平沢郡浦什面遠井洞		B11		
江原・溟州郡注文津邑注文里		B1b		
忠北・沃川郡沃川邑長夜里		B1b	石鏃三'	
〃 清原郡南二面陽村里		B1b	石鏃四'	
〃 清原郡文義面九龍里		B11	石鏃八、石斧一、	『歴史学報』一一
〃 永同郡梅谷面楡田里	支石墓	B11	石鏃六、	
〃 堤川郡清風面黄石里	支石墓	B11	石鏃一〇、	
〃 〃 〃 〃	〃	B11	石鏃一二、土器一、	
〃 〃 〃 〃	支石墓	B1b		
忠南・天安市斗西里	住居址	B11	石鏃、石庖丁、扶入石斧	
〃 舒川郡文山面文章里		B11		
〃 論山		B11		
〃 青陽郡青陽面		B11		
〃 大徳郡懷徳面瓦洞里	竪穴式石室	B1b	石鏃二、土器片	
〃 礼山郡古徳面夢谷		B1a		
〃 長水郡長水面大成里		B11		
〃 金堤郡金溝面龍池里		B11		

以上のうちから、特殊な出土状態を示した「永同楡田里支石墓の特異の構造と副葬品」^⑤ また、極端に形式化した石剣の代表例として「金海茂溪里支石墓の出土品」^⑥ を紹介することにしよう。ともにソウル大学の金元龍教授の論文による。

忠清北道永同郡梅谷面楡田里は、錦江を最も上流に溯ったところ、そこにある支石墓の一基から、一九五九年に、二本の B11 形式の磨製石剣、八本の磨製石鏃、一本の磨製石斧が発見された。この支石墓の地上構造は、高さ二米の巨大な塊状の蓋石と、低く小さい支石とからなる典型的な南鮮式基盤形であった。ところが、地下に四層の板石の層があって、一番上の板石層と二番目の板石層の間から石鏃八本が、また第二層と第三

◇ 錦山郡秋富面草大里	BI I		
◇ 益山郡望城面漁梁里	BI I		
全南・谷城郡立面	BI I	石鏃二	
慶北・青松郡巴川面徳川里	BI b		
◇ 盈徳郡倉水面	BI b	石鏃五	
慶南・蔚山市新亭里	BI b	石鏃三	
◇ 三千浦市竹林洞	BI I		
◇ 金海郡長有面茂溪里	BI I	石鏃六、銅利器三	
◇ 昌原郡鎮東面城門里	BI I		『歴史学報』一〇

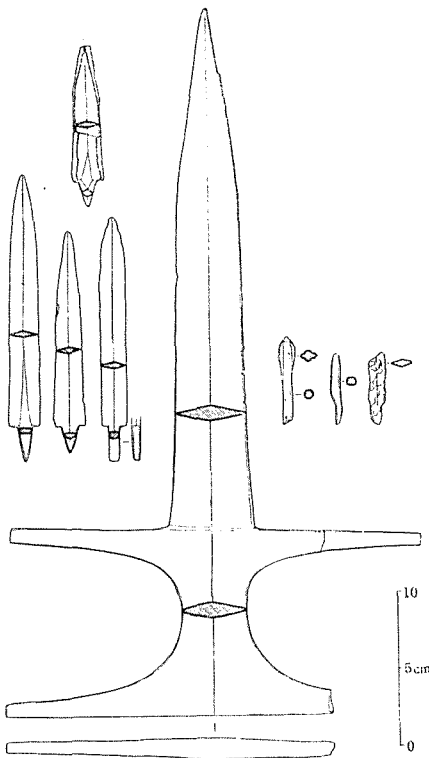
層の板石層の間から石剣一本が、そして第三と第四の板石層の間からは、石剣一本と石斧一本が、それぞれ発見されたと言う。報告者金元龍教授によると、この支石墓の地下構造は、元来、土窟のようなものであり、板石の層は、曠の蓋石的存在で石器類はその板石の層と層の間に分離して副葬されたのであろうという解釈である。

金元龍教授の以上の解釈の如くであれば、本例は、朝鮮半島の支石墓として、構造の点でもまた副葬品の出土状態の点でも、いままでに確認されたことのないものである。

慶尚南道金海郡長有面茂溪里出土の石剣は、黄白色の粘板岩を

磨研して作った BI 形式であるが、劍把の部分の極端な誇張が目につく。全長四六糎というのは、既発見の石剣中、最大の部に入る。劍把の部分は、長さ四・一糎に対し、左右に突出した鐔の長さ二六・五糎、把頭は一端を欠失したが元来は三一糎の長さとして推定される（第1図）。朝鮮磨製石剣の退行形は、有柄式の劍把に最も端的にあらわれるが、それには二つの傾向がある。劍把の双曲線の反りが鈍くなって鐔と把頭の斗出が弱まる傾向と、それとは逆に、鐔と把頭を強く斗出させる傾向である。金海茂溪里の石剣が第二の傾向の極端な例であることは言うまでもない。これまでの代表例は昌原郡熊南面外洞里の同様の遺跡⁷⁾から出土した石剣であった。そこで金元龍博士は、この種のを金海―昌原式石剣と呼ぶことを提唱した。

さて、金海茂溪里の石剣と一緒に出土した遺物としては、磨製石鏃八本（うち完存六本）、管玉三個、土器片四点、銅利器残片三点がある。石鏃は有茎柳葉形、長さ一八糎の大形品を含む。管玉は淡緑色の石で、大が長さ三糎に径〇・八糎、小が長さ一・八糎に径



第1図 金海茂溪里支石並出土の磨製石剣・石鏃・銅利器片

○・八種である。土器破片は丹塗磨研、軽く外反した口縁部を持つ有頸小形の壺のものか。銅利器残片のうち二点は鏃の鏃の一部で、あとの一点(第1図右端)は剣の鏃の一部らしく割りこみが見える。いずれにせよ、石剣と銅利器の共存は珍らしく、それらが次のような支石墓の副葬品であったことにも重要な意味がある。その出土遺跡については、積石塚のような外観の石積の構造で、長方形の竪穴式石室のなから、東枕の伸展葬であったと想像されるような状態で、遺物が見出されたという。しかし、金元龍博士は、現地を視て、これは典型的な南鮮式の支石墓であったと推

測した。すなわち、近接したところに現存する碁盤形支石墓と同様のものではあったが、その上部の構造が取除かれ、下部の構造のみがのこったものというのである。碁盤形支石墓の下部構造に、積石塚に似た石の堆積があり、そのなかに石室または石棺を包蔵する例は大邱^⑧その他で知られている。半島南部では、支石墓から遺物が発見される場合、磨製石剣か磨製石鏃、あるいは両者の共存、とくに一本の石剣に数本ないし十数本の石鏃を伴う例が多い。しかし、銅製品を伴うことは、めったにない。したがって、右の金海茂溪里支石墓から、石剣と

石鏃にまじって、鏃および剣と思われる青銅製品が見出されたのは、ひどく錆びた破片であっても、特別に重要な意味をもつ。なぜならば、これは磨製石剣と銅利器との共存を実証するほとんど唯一の例として学界に知られてきた全羅南道高興郡豆原面雲釜里支石墓群の発見に次ぐ^⑨からである。その上、高興雲釜里の支石墓群では、磨製石剣と銅剣破片が別箇の埋葬址から見出されたのに対し、金海茂溪里の場合には明かに一支石室内に共存していたから、より正確な共存例を加えたと云えよう。

3

考古学者が細形銅劍と呼ぶ型式の銅劍は、銅矛・銅戈とともに、朝鮮の初期金属文化を代表する銅利器であり、半島の北から南にかけてひろく分布する。第二次世界大戦までに学界に知られた数は、劍だけでも百を下らない。戦後も、すくなからぬ出土例が北鮮の考古学者によって報告されている。韓国でも慶州九政里出土遺物群をはじめ著しい銅劍類の発見が報告された。今回、韓国国立博物館で見た銅劍類のなかでは、忠清南道扶余郡草村面蓮華里出土のもののが最も私の注意をひいた。なぜならば、伴出遺物と出土遺跡が特殊であるとみただからである。すなわち、四本の細形銅に勾玉の形をした飾玉一顆と細線文鏡の破片が伴って、原始的な石室墳から出てきたという。そういうことを、現場に赴いて調査した国立博物館の金載元館長らが明らかにした^⑩。

遺跡と遺物出土状態について、私が聞いたところを記すと、次の如くである。

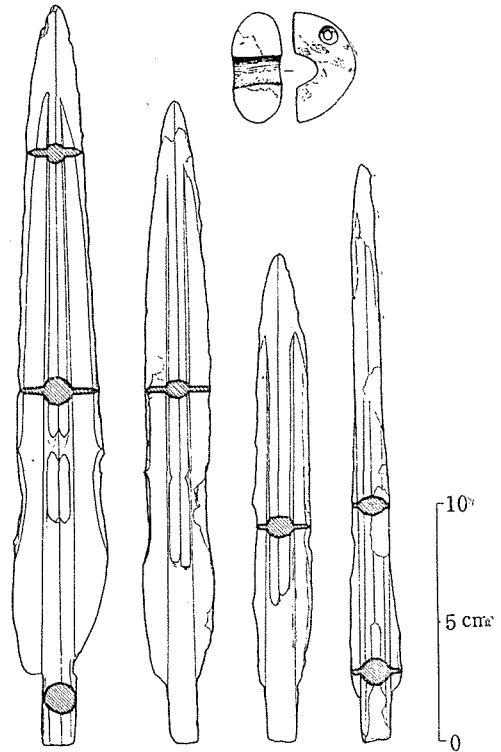
忠清南道扶余郡草村面蓮華里において、かつて砂防工事の際、巨石が出たという所を、土地の人が再び掘りおこして銅劍三本を見つけたのは、一九六一年か六二年のことで、その後もう一本の銅劍が出た。一九六三年に国立博物館から金載元館長らが出かけ

て行って遺跡を調べた。遺跡は、岩盤に掘りこんだ堅穴のなかに石室を造ったもので、南東東から北西西に長く、一米四五の長さの中が五五種、深さが北壁で五五種あり、北西部の側壁と底石は原状をとどめていた。蓋には板石を用い、側壁は一重に板石をたて並べた。蓋と底の石材は同質だが、側石はちがうと言う。

金館長らが現場で発見したのは、勾玉状の飾玉だけであった。細文鏡の破片二個は、土地の人が掘り出した土のなかから採集された。この飾玉と鏡片の発見が、石室の構造を確かめ得たことと相まって、本遺跡の考古学的意義を重要なものにする。飾玉が南壁の西かどから三〇種くらいのところにあつたのに対し、銅劍は石室の東部から出たと言う。

四本の銅劍は大小差があり、最大のもので長さ三一・三種、最小のものは長さ二〇種であった。三本は漆黒の鮮鋭な鍔上りを示すが、一本は白緑斑の多い青銅質で漫漶して、両刃の様子など全くわからない。前者は三本とも刃こぼれがひどいが、鎗にも両刃にもやや目立った刃方があって、梅原博士が細分して第二類とされたもののなかに入ると思う。第2図の右端が、後に出たという剣である。

鏡片は、第3図に示すように、背文が隣接する三角形を方向を異にする平行線で填めた一種の組文であるところから、細線鋸齒



第2図 忠清南道扶余郡草村面蓮華里
出土銅劍と飾玉

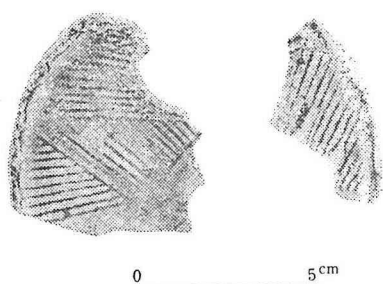
「キララした光沢を発する。天河石であろうか。勾玉状と言うが、古墳から出る勾玉のように頭部とか尾部とか区別できるような太さの変化はない。背(外)の方にとがり、腹(内)側が厚いので身の断面は三角形に近い。玉環を真半分に截ったような形である。その一端に一孔を貫通したのは、垂飾の玉であったことを示す。雄基松坪洞貝塚出土の飾玉に比べるとはるかに形が整って大きい。なお、ここで、旧朝鮮総督府博物館の陳列品中に類似の飾玉が一顆あったことを附記しておく。

文鏡のものと知る。しかし、二片とも磨滅損傷がひどく、錆びているので、肝心の鈕の部分と縁の部分の原状がわからない。また、もと二面分の二破片なのか、別の鏡のものかも、はっきり言えないが、ともに直径約一〇釐の鏡の破片である。また白緑の色を呈し、文様の鑄出は鈍く、型くずれがあるので、粗造の類に入れねばならない。伝平安南道孟山出土の鎔範の一面の文様に最も類似すると思う。

勾玉状の飾玉(第2図上)は、白斑を雜えた淡い碧色の石で、キ

係の確認は、重要な貢献である。私としては、これらが原始的な石室から出たという事実には深い関心を払わざるを得ない。

扶余草村面蓮華里の遺跡の状態は私に、鳥居龍藏博士が大正四年(Son)同じ扶余の佳増里で調査した石鏃石剣を出した石室の状態を思い出させる。もっとも佳増里の場合には、蓋石についてなにもわからなかったが、厚い石を立てならべて側壁を作り、第二号と第四号は板状の石を敷いて床とした構造であった。この構造は、「組合せ式石棺」とは言えないので、私は「原始石室」と



第3図 忠南扶余草村面蓮華里出土
鏡片拓本 (細形銅劍と伴出)

製石鏃・石庖丁・石斧・赭褐色無文土器・丹塗磨研土器など、石器時代的なものばかりである。そのうちの磨製石劍が細形銅劍を模作したものであることは、すでに定説になっているが、しかし、銅劍の類が磨製石劍・石鏃以下の副葬品リストに名を連ねることは、前項金海茂溪里所在の支石墓の発見まで知られていなかったと思う。

他方、磨製石劍以下、石器時代的な副葬品を出す前述の埋葬址から、銅劍の類だけを出土した例があるかどうか。前に言及した全南高興郡豆原面雲垈里支石墓群における銅劍破片の発見は確かにその一つである。しかし、この銅劍片の質も形も、いわゆる

したが、三上次男博士の言う「石棺墓」の範疇に入るもの。この種の石棺墓は、南鮮では、組合箱式石棺とともに、しばしば、碁盤形支石墓の地下構造の主体となっている¹⁶。そしてこれらの埋葬址に副葬された品物のリスト¹⁷をみると、磨製石劍・磨

「細形銅劍」とは、趣を異にする。第二の例としては、「ソウル東郊外の史前遺蹟」の一つ、四老里の発見をあげねばならない。故横山将三郎教授によれば「割石で囲まれた広さは畳一枚ほどのものであって東西に長くなった矩形であった。その中から完全な銅劍一本と銅銅製尖頭器一本とが出土した。……なお土器が一個伴出した」という。私の記憶に誤りがなければ、その銅劍は、細形銅劍第二類の形であり、尖頭器とともに漆黒色の鋭利なものであった。

扶余草村面蓮華里の発見は、したがって、銅劍の類が南鮮土着文化のものと考えられる埋葬址から出た第三の例ということになる。しかも、細線文鏡と勾玉の形に似た飾玉を伴出した点でソウル東部四老里の場合と同様、初期金属文化としては、明らかに第一次的な文化の所産である。

4

私は、最後に、全羅南道靈岩から出たと言われる一群の銅利器銜范のことを述べたい。崇実大学(ソウル市)の金良善教授のコレクションのなかにある銜范群は、私が今回韓国で見せてもらった新資料中、最も私の心をとらえたものと言えよう。私に与えられた滞在期間が終る前日の午後、金良善教授コレクションの見学が

許された。しかしそのときはもう一点一点を精しく観察するだけの時間はのこされていなかった。また同教授は鎧范については近日中に発表するから、実測・写真撮影・拓本とりなどの記録作りは遠慮してほしいと求められた。したがって、結局、展示されたコレクションを一瞥したにすぎないことになった。それをここで記述するのは、いかにもおこがましいが、鎧范については、幸い、金良善教授自身が「再考を要する磨製石剣の形式分類と祖形の問題」を論じた際、言及しておられる。その論文を載せた『古文化』第一輯は、日本では入手困難であるから、関係の部分をごくに紹介するのも無益ではなからう。

金良善教授が同論文中でその鎧范の群についていかに記述しているか、初めから順に記してゆくと次のようになる。

解放以後に出土した金石併用期の遺物は多数あることを言っており、その主要なものを数えたなかに「各種銅兵器の鎧范十三個」がある。そして磨製石剣に関係ある新資料若干を紹介したその3に「全南靈岩出土朝鮮式銅戈の鎧范」を挙げ「一九六〇年靈岩から十余種のちがった鎧范と一緒に出土した」と記す(以上は『古文化』第一輯7頁)。

また「全南靈岩出土の鎧范は、いままで、我国から発見された銅兵器の全部を包含しただけでなく、未発見に属する異形兵器の

鎧范もすくなくない」と記し、続けて「その上、鎧范にあらわれている銅剣と銅戈の形態は、大同郡将泉洞出土の鎧范にあらわれているそれとは、比較できないほど精巧なもので、石岩里出土の銅戈と入室里出土の銅剣と同様、最も典型的なものに比べらるべきである」とそのすぐれた作柄をたたえ、「かような事実は、我國の銅兵器の種類が多かったことを証明して余りあり」としている(同上9頁)。「靈岩出土の三組の朝鮮式銅剣の鎧范」という条(同上10頁)は、数についての手がかりとなる。また、同論文に附載の図版(第3)からは、「朝鮮式銅戈」の鎧范は、すくなくとも二個あったことがわかる。

これ以上精しいことは、近く発表の予定という金良善教授の記述にまっぴかかない。私は前に述べたように、文字通りの一瞥ができたにすぎないので、何もつけ加える資格はないが、そのときの記憶にのこったことを書き添えておく。

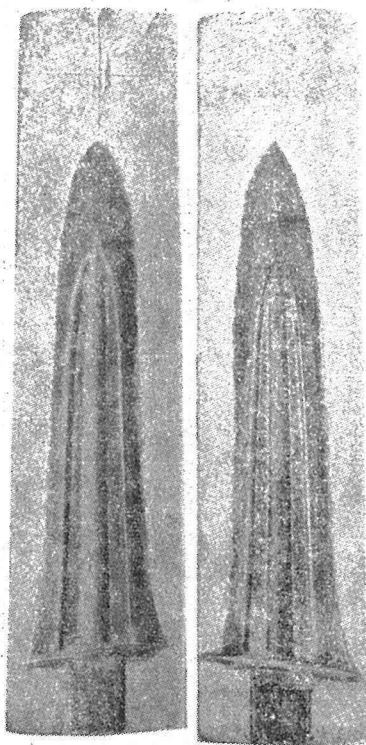
私が見せてもらった鎧范は、この一括出土品のすべてではないというのであったが、それでも剣、戈、斧、鏃、および釣針状の鉤の五種類の鎧范が確かにあった。朝鮮における初期金属文化の遺物としては、銅鏃は珍らしく、銅斧、銅鉤の類は知られていないから、それらの鎧范は、金良善教授の「未発見に属する異形兵器の鎧范」にあたる。また、同教授は「全南靈岩出土の鎧范は、

いままで我国から発見された銅兵器全部を包含する」と言はれた。私が見た限りでは劍と戈の鎔范はあったが、鉞の鎔范があったかどうか記憶がない。

それらはすべて石製鎔范であった。やや黄色味をおびた白灰色であったと記憶するが、手で触れることを許されなかったので、その石質が何であるか、はっきり言えない。見た目には、滑石というよりは、堅緻な砂岩のよう

うに見えた。見せてもらった限り、すべて完形であったのに驚嘆するとともに、それらが一箇所から揃って出土したと言われても、それを否定するようなことは、外観に関する限りないと思った。

劍の鎔范を見たとき、私は反射的に戦前から学界に知られた平安南道大同郡栗里面将泉里出土の細形銅劍の鎔范^⑩を想いおこした。同様に、長方形の范の両面に細形銅劍の形を彫りこんだものである。私が見たのは二個であったと記憶する。しかし、「三組の朝鮮式銅劍の鎔范」があったという、前掲の金良善教授の記載から、実際には合せ型が三組あったことがわかる。また将泉里例と同様、劍形の彫りこみは二枚の型を合せたとき、ナカゴの末端が湯口になるようになっていた。そして劍形の彫りこみの部分は、一面に



第4図 全南靈岩出土と伝うる朝鮮式銅戈の鑄型（『古文化』第1輯より転載）

煤けた黒色にかわっていた。范の小口の部分にあらわれた湯口、つまり茎の末端にあたる部分のまわりも、煤けた黒色が石に浸透して縵綯のように見えた。そして、型の合せ目の印である縦線を、湯口の両側に二本刻んであった。およその大きさは、長さ三五糎、巾八糎、厚さ三―四糎であった。

戈の鎔范は二個あったと記憶する。金良善教授論文の図版3（第4図はその転載）からは、すくなくとも二個あったことを知る。

同教授が「朝鮮式銅戈の鎔范」と言うとおり、彫りこまれた戈形は、朝鮮半島の北から南にかけて分布する、嘗ての「 그리스形銅戈」の形である。その鋒部の巾が狭く、闕部の長さが短いことに、注意したい。木鞘を伴ったことで著聞の平壤貞栢里出土銅戈（朝

『鮮古文化綜覧』第一卷 図版第六18)に比べると、鋒部の形は類似するが、関部は短い。それよりは伝忠清南道出土の銅戈(同上図版第三四157)の方がこれに近い形である。劍の鎔范と同様、彫りこまれた戈形は煤けた黒色となり、「内」の末端が范の小口に開いて湯口となる。小口中央の縦の刻線は、型を合せるときの緊縛のためのものとみた。

斧の鎔范は、鏿と鉤の鎔范とともに、劍・戈の鎔范よりもずつと小形であった。斧の形は鏿を持つ縦に長い短冊形、鏿も袋部を持つ式であった。鉤は逆刺つき釣針に似た形であったが、いままの一般的な釣針よりは大形であった。残念乍ら、斧以下の鎔范については、時間の関係で、詳しく観察することが出来なかつたので、甚だ不確かな記憶しかない。

5

以上、私は、金屬文化初期に関する新出資料の一部を紹介し、所見を添えたのであるが、これらは、朝鮮考古学界にとっても重要なものと言えよう。

私は、ここで、試みに朝鮮における初期の金屬文化に関する遺物を、銅製の利器すなわち細形銅劍・銅戈・銅鉞が代表する第一次的なものと、磨製石劍・石鏃を標識とする第二次的なものに分

けてみる。第一次的なもの——銅劍・銅矛・銅戈など——は、中國を含むアジア大陸のどこかに母胎があつて、そこから半島に入ってきたと思われるグループで、金屬製品そのものである。それらの出土遺跡を検討すると、明確な遺構のものに限れば、土壙墓あるいは地下の木槨墓という形式の埋葬址がほとんどすべてである。これに対して、細形銅劍を手本として作られた磨製石劍によつて代表される第二次的なものは、共存遺物のリストを検討すれば、すべて、石器時代以来の伝統をひくものばかりで、土着文化の所産と解さざるを得ない。しかも出土遺蹟として、性質の明確なものを挙げれば、埋葬址であるところの組合箱式石棺・石室・支石墓の類が知られているが、未だ嘗つて、土壙墓あるいは地下木槨墓から発見された例をきかない。

初期金屬文化第一次とそれを受容した第二次の文化との間には、以上のような明確な、あるいはきわだつた差がある。本篇の2の後半に紹介した金海茂溪里支石墓の調査は、第二次文化のなかに、たまたま入りこんだ第一次文化の痕跡をあきらかにし、3に述べた扶余草村面蓮華里石室内に銅劍・細線文鏡・飾玉を副葬した事実とともに、第一次文化と第二次文化の接触を示すまれな資料と言えよう。もっとも両者が接触しなかつたというのは、あり得ないことである。今まで接触を示す考古学的出土例が稀少であつたこ

とが、私にはむしろ不思議である。将来、両者の交渉を実際に証明する出土例がふえることを期待する。

4で扱った一群の鋳型は、全南靈岩の出土という所伝が真実とすれば、朝鮮出土の鋭利な銅劍・銅矛・銅戈の類は、すべて大陸からの舶載とみてきた学説に待ったをかけたことになる。なるほど、戦前から細形銅劍・鐔・金具・小銅鐔などの鋳型が発見され、それによって、半島内でも銅利器や鐔の鋳造が行はれたことに疑念をもつものはなくなっていたが、なにも半島にも、漢文化の濃厚な平壤附近に著しかつたので、その鋳造は侵入してきた大陸文化に属する鋳物師によって行われていたというように理解されていたと思う。平壤附近を外れては、ただ江原道高城郡杆城面巨津里で銅鍔の、同通川郡通川邑附近で銅劍の鍔断片が一個つつ採集されたにすぎなかった。全南靈岩と言えば、半島の最も西南の端に近い。そこから、三組の細形銅劍の鋳型を含む十三個の鋳型が一緒に出たというのであるから、既往の銅利器鋳型の分布図は書きかえられなければならないが、単に分布図に、ドットを書き加えただけで畢る問題ではないだろう。与えられた紙教が尽きて、詳しく私見を述べ得ないが、朝鮮出土の銅劍・銅矛・銅戈は鋭利なものとも、大陸からの舶載と限ることは出来なくなつたと考へる。私は慶州附近における関係遺物の多量出土と併せて、初期

金屬文化の第一次的なものが、朝鮮半島の南の端にまで及んだ証拠とみる。第一次金屬文化の担手たちは、単に、製品としての銅兵器を携行して来ただけでなく、半島に住みついて、そこで鋳造を行うに至つた。しかも、彼らは石器時代以来の文化を保つた第二次文化の担手たちとは別個の社会を形成していったといふかつての私見を変更する必要はないと思う。なぜならば、さきに指摘したように、両者の間には、埋葬址の構造に区別があり、伴出遺物のリストを異にして、なかなか埋りそうにもないへだたりが、依然として残っているからである。けれども、これら鍔断の発見は、既発見の銅劍・矛・戈の類のなかに、半島内で作られたものが相当多量あつてよいとの観測を生むし、第一次金屬文化の担手が、半島のしかも南端にまで根をおろして、その文化を發展させたという推定を可能にする。日本の北九州における第一次金屬文化の発現に緊密な関係があることも充分肯定されよう。しかも劍・矛・戈の兵器類だけでなく、鑿・斧というような工具の鋳型があり、鉤の鋳型もあることから、私は、そこに根をおろした金屬文化が大陸からの借りものでない固有のものに到達していたと認めたい。単に兵器の類だけでなく日常の道具の類を鋳造していた証拠を、製品は現在に遺存しないが、これらの鋳型は提供したのである。

真正の金属文化の成立の背後には、単に鑄造技術の発達というだけでなく、たとえば青銅の材料である銅や錫などを断えず補給し、あるいは、製品の分配が出来る交易ルートを確保する、そういう社会機構が確立していなければならぬ。朝鮮半島における第一次金属文化の担手たちの社会には、そのような機構が存続していたことを、これらの鋳型群は、物語っている。考古学上まことに重要な資料と言はねばならない。

- ① 韓国国立博物館の前身である旧朝鮮総督府博物館にも、同様の方法で、埋蔵文化財が集まっていた。
- ② 有光教一『朝鮮磨製石剣の研究』（一九五九）一五一—一六頁。
- ③ 同右 第二章。
- ④ 同右 第四章。
- ⑤ 金元龍『歴史学報』第十二輯（一九六〇）（韓文）。
- ⑥ 金元龍『東亜文化』第一輯（韓文）。
- ⑦ 朝鮮総督府博物館『博物館陳列品図鑑』第四輯第一葉。有光教一『朝鮮磨製石剣の研究』図版第一〇₁₃。
- ⑧ 藤田亮策「大邱大鳳町支店石墓調査」『朝鮮古蹟研究会昭和十一年度古蹟調査報告』五六頁以下及び『同上昭和十三年度古蹟調査報告』
- ⑨ 梅原末治・藤田亮策『朝鮮古文化綜鑑』第一卷（昭和二年）八七頁。有光教一『朝鮮磨製石剣の研究』（一九五九）六二頁。
- ⑩ 金元龍「慶州九政里出土金石併用期遺物について」（韓文）『歴史学報』第一輯（一九五二）。
- ⑪ 近く金蔵元博士がその報告を『震檀学報』に発表する予定とぎく。
- ⑫ 『朝鮮古文化綜鑑』第一卷六五頁。
- ⑬ 『朝鮮古文化綜鑑』第一卷 図版第四四。
- ⑭ 『朝鮮磨製石剣の研究』図版第二九。
- ⑮ 三上次男『満鮮原始墳墓の研究』（一九六一）五八九頁以下。
- ⑯ 前出「大邱大鳳町支店石墓調査」の附図及び図版、たとえば『昭和十一年度古蹟調査報告』図版第六五—六八、『昭和十三年度古蹟調査報告』図版第八七、八九など参照。
- ⑰ 『朝鮮磨製石剣の研究』五五頁—五六頁及び三上次男『満鮮原始墳墓の研究』第3表（八三頁）・第4表（八六頁）及び第一表（五九四頁—六〇二頁）の諸表を参照。
- ⑱ 横山将三郎『愛知大学文学会・文学叢書』第五・六輯（昭和二八年）八三—八四頁。
- ⑲ 『朝鮮古文化綜鑑』第一卷 図版第三九・第四〇、七二—七四頁。（京都大学教授）

八一頁以下）。

New Materials for the Study of Early Metal Culture in Korea

by

Kyôichi Arimitsu

The writer, a specialist in Korean Archaeology, visited Korea for the first time in eighteen years in the autumn of 1963, and inspected museum collections and excavation sites. In the present article, he mentions various archaeological materials of particular interest which have come to light there in recent years. They include the following: (1) Stone daggers, arrow-heads and a celt which were sandwiched in between the stone layers of an unusual dolmen-like structure at Yujonri, Yongtong, Chungchong-puk-do. (2) A stone dagger with an elaborate hilt and stone arrowheads which were discovered with bronze implements at a site in Kimhae, Kyongsang-nam-do. (3) Four bronze daggers, a bronze mirror with a decorative pattern composed of juxtaposed triangles containing parallel lines, and a magatama-like bead which were found in a cist grave hollowed out of rock located at Puyo, Chungchong-nam-do. (4) A group of two-part moulds used for casting bronze implements such as daggers, halberds, chisels, hooks and axes which were discovered at Youngam, Cholla-nam-do.